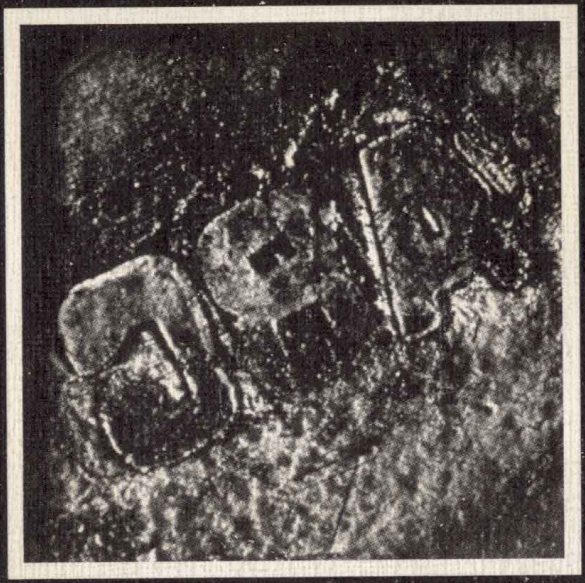
社会言語学の方法

ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ［著］
原聖・標谷啓介・李守［訳］



三元社

社会言語学の方法

発行日……1990年4月25日 初版第1刷発行

著者……ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ
訳者……原 聖＋糟谷啓介＋李 守
発行所……株式会社三元社
〒113 東京都文京区本郷2－24－1 桑名ビル102号
電話／03－814－1867
印刷……大盛印刷株式会社
製本……有限会社越後堂製本
コード……ISBN4－88303－000－8
装幀……末廣伸行
表紙原画……一原有徳

SANGESHA

itte Schlieben-Lange
Soziolinguistik

社会言語学の方法

ブリギッテ・シリーベン＝ランゲ
[illegible]

三元社

书馆

Soziolinguistik-Eine Einführung (Zweite, überarbeitete und erweiterte Auflage)
by Brigitte Schlieben-Lange
Copyright ©1973 Verlag W. Kohlhammer GmbH
by arrangement through ORION LITERARY AGENCY, Tokyo

社会言語学の方法

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

まえがき 7
第二版へのまえがき 11
序論 社会言語学がとりあげるべき問題 13
第一部 社会言語学の歴史 33
第一章 一九六五年ごろまでの言語学「社会学的視点の排除と社会言語学的傍系」 34
第二章 北アメリカの社会言語学 44
1……政治と学問の状況……45
2……さまざまな社会言語学派……50
補節……英・仏・伊の社会言語学……63
第三章 西ドイツの社会言語学 79
1……西ドイツにおける社会言語学の特色……80

2……六〇年代末の西ドイツにおける教育政策の位置……82
3……ドイツ社会言語学の主要論文解題……86
4……言語の補正教育と解放教育……99

第二部　社会言語学の諸問題　105

はじめに……106

第一章　歴史的個別言語の混質性　110
1……歴史的個別言語の混質性……112
2……個々の話し手の多言語使用能力……120

第二章　一国のなかの多言語の共存　125
1……「客観的に」確認可能なちがいとコミュニケーションのむずかしさ……126
2……アイデンティティーの象徴として、また、威信の象徴としての言語……132
3……新興アフリカ諸国の事例……135

第三章　言語の成文化　139

第四章　態度　144

第五章　社会言語学と言語史　151

第六章　社会言語学はどのような学問か　155
1……データ収集の問題……156
2……社会言語学の理論構築の問題……165
3……社会言語学のがわから一般言語学におよぼした影響……174
4……隣接諸領域にたいする社会言語学の立場……175

補論　社会言語学におけるあらたな展開のかずかず　179
訳者あとがき　193
注　XXXX
邦文文献リスト　XXVII
追加欧文文献リスト　XXIII
欧文文献リスト　VII
人名索引　V
事項索引　I

I まえがき

授業の下調べをする教師であれ、言語学科の入門講座で最近増えつつある社会言語学にとくに興味をもつ学生であれ、この分野に関心をもつものにとっては、社会言語学とはあたかも、社会と言語の関係という輪郭のはっきりした対象領域と、世間でちゃんと認知された方法をもった学問分野のようにみえるかもしれない。だが、あいにくそうではない。社会学と言語学がまとまろうとしても、このふたつの学問はあまりにながいあいだ別々に研究をつみかさね、それぞれが多様な内容をもっているので、橋わたしをこころみても、わずか数年程度でおいそれとはことがすすまなくなってしまっている。両者の結びつけが問題もなく楽にすすむように思わせる社会言語学の概述などはおよそ偽物にすぎない。

> 社会構造、文化、言語がたがいにからみあっていることは、哲学的人間学の基本的考えかたに属するが、経験的な社会科学の分野には、その内実がまったく不明瞭なままで導入された。この考えかたについては、社会学や文化人類学の教科書でたいていお目にかかるけれども、このからみあいを精密に規定し、因果関係をはっきりさせて分析するこころみは、まだやっとはじまったばかりだ
>
> （ルックマン「言語の社会学」、一九六九年、一〇五一ページ）。

おなじことが言語学についてもいえる。もしかすると、社会的側面をかえりみないという点では、こちらのほうがもっと徹底しているかもしれない。社会学が言語学的視点をかえりみないのは怠慢のなせるわざであるが、言語学では社会学的視点をかえりみないことがおきまりの手順となっている。

このふたつの分野のそれぞれの内部が多岐にわかれてしまっていることが、双方の理解をむずかしくしている。社会学者にとって不都合なのは、言語学を利用しようと思っても、信頼にたる成果をそなえた言語学の統一的枠組みが存在しないことだ。もっとも、自分の専門分野でもおなじようなことがあるわけだから、これはけっしておどろくべきことではない。言語学者のほうでも、社会学にふれるなかで、「役割」とか「階層」とかの概念が、けっして楽にとりあつかえるものではなく、まさにその概念自体に異論があることを知って当惑してしまう。いずれにしても、ふたつの分野の相互理解にとって最大の障害となるのは、こうした信頼するにたらないもろもろの概念なのではなく、それぞれの分野に特有の理論状況にあるのだ。

社会学においては、かんたんにいえば、観察と実験でたしかめられ、かつくり返しおこりうる事実について研究する経験科学であるのか、それとも、それぞれの事象は歴史的にいちどおこるだけでそれをどう理解するかが唯一問題としうるものである以上、歴史的性格をもつ人間の共同生活を研究するのに経験科学的手法はふさわしくないのではないか、といった実証主義をめぐる論争が火花を散らしている。

言語学では、社会学で争われたような実証主義をめぐる論争はこれまでほとんどおきなか

った。こうした問題にたいしてはまったく聞く耳をもたなかったといってもいい。もっとも、みずからを自然科学になぞらえる理念をかかげる（といってもデータ収集にさいしては、そうした理念からむしろ遠ざかるのだが）変形文法学派と、人文学や解釈学の伝統のうえにたつヨーロッパのいくつかの言語学派との、これまで決着をみていない論争において、社会学における論争とまったく同一レベルの理論的な争いをかいまみることができる。

社会言語学の研究においては、社会心理学や発達心理学的観点をどうしても考慮に入れざるをえず、学際的な理解をふかめるための障害はさらに倍加するので、問題はもっとやっかいだ。

したがって、このような出発点でのやっかいな問題にまだまだ対処しなければならないのだが、本書では、社会言語学がいったいどんな学問かをえがいてみることにしたい。ここで、わたしはつぎにあげる三つの点を念頭においている。

1、西ドイツでは、社会言語学といえば、せいぜいのところ社会階層ごとに特有な言語行動についてのバーンスタイン＝エーヴァーマン理論ぐらいにしか、理解されていない。ほかの理論の存在をしめすことで、この理論ばかりが社会言語学ではないことをしめさなければならない（社会階層が重要だと気づかせるためには、この理論はたしかに有意義なのだが）。社会言語学の課題と考えられる諸問題を体系的に提示することで、こうした社会階層に特有な言語行動についての理論もよりひろい視野のなかで考察されることになる。さらに、こうした社会階層理論の教育学への影響についてあれこれともちあがる議論を批判的に検討してみたい。

2、それぞれの国の政治的、学問史的状況のなかで、社会言語学がとっているいろいろな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

方法をえがいてみたい。学問のいとなみというものは、その個々のおかれた状況のなかでえがかれねばならないだろう。社会言語学の発展と受容は、学問史の一部をなすものと理解されることになる。

3、最後に、社会言語学に関心をもつひとびとにたいして忘れずにいっておきたいのは、データ収集についての問題と方法である。とくに言語学者というもの（方言学者はともかく）は普通こうしたフィールドワークの問題になじみがないからだ。

本書は、学問史と学問領域の概説の二部にわかれているが、そのつどたがいに関連しあう事項を多岐にわたってあげている。したがって、第二部でとりあげた研究のうち、すでに第一部でふれたものも多い。

各章のはじめに、注として、関連する研究ないし問題について、さらによく知るための文献をいくつかあげてある。

本書を書くにあたっては、一九七二年の夏学期に、フライブルク大学でハンス＝マルチン・ガウガー教授とわたしが行なった上級ゼミナール（大学での三段階のゼミナールのうち最上級のもの）に多くを負っている。このゼミに参加してくれたすべてのひとに心から感謝しておきたい。また、進行中の研究プロジェクトや学校での教育の成果について情報をあたえてくれたひとたちにもお礼を述べておかなければならない。

一九七三年四月、フライブルク＝イム＝ブライスガウにて、

ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ

2　第二版へのまえがき

この社会言語学の入門書は、一九七三年、直面する学問史的問題や教育政策を意識して書かれたが、以来、それらの状況はかなりかわってしまっている。こうしたなかで、社会言語学の対象領域の輪郭はむしろ不鮮明になってきた。とはいえ、関連領域である言語学や社会学では、初版のまえがきで指摘したような欠点をともに部分的には克服しつつはある。社会学では、この間に、相互理解とか言語にかかわる部門でかなり重要な研究が行なわれているし、言語学では、言語学者どうしの激しい論争にいたるような理論的方法論的な意見交換の機会が以前にまして増えてきた。しかしながら、一九七三年と決定的にちがうのは、当時は教育政策上の動機が推進力となって社会言語学が西ドイツでひろまっていたのだが、そうした動機がいまでは教育部門での緊縮財政のあおりをうけて失われてしまったということだろう。とはいえ、状況のさまがわりは、良くなったともいえるし、悪くなったともいえるものだ。教育政策全般への関連を失ったことをたいへん残念に思うひともあるかもしれないが、この間の発展が、個々の問題設定の精密化、具体的な措置の提示につながっていることは確認しておかねばならない。楽観的にいえば、社会言語学は、たしかに当初の勢いのよさはなくなったかもしれないが、そのことでかえってその考えかたが個々の教育政策や学術研究のなかで実を結ぶようになってきている。たとえば、ドイツ語教育のためのあたらしい教科書がそうだし、移民労働者や方言の話し手の言語についての諸問題の研究がそれだ。

このように状況がかわったために、第二版をださざるをえなくなってしまった。といっ

ても、第一部の学問史も第二部の諸領域の概説についても、その妥当性はけっして失われているわけではないと思うので、あらたに一章をつけくわえて、最近の動向を概略するだけにとどめることにした。ただ、初版での結論や説明不足の箇所で、あらたな進展のみられた事項についてだけは修整してある(たとえば、移民労働者の言語の研究、方言学との共同研究、語用論的な問題設定の導入などが必要になってきている)。初版にあった教育政策についての一章とカリキュラムを抜粋した付録は、ともに、一九七三年当時の教育政策にまつわる論議のなかでしか意味をもたないので削除した。同版で引用した研究プロジェクトのリストもまた、ビーレフェルト他『社会言語学と経験』(一九七七年)があらたに現状を概述しているので、はぶくことにした。この第二版には、もちろん批判的に読んでくれた読者から寄せられた数多くの意見がもりこまれている。こうしたひとたちの激励に心から謝意をあらわしたい。なかでも、エウジェニオ・コセリウ、ノルベルト・ディトマール、ウォルフディートリッヒ・ハルトウンク、ウルリッヒ・クノープ、ウータ・クヴァストホーフの諸氏にはとくに記してお礼をいうことにする。

一九七八年二月、バート＝ヴィルベルにて、

ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ

序論

社会言語学がとりあげるべき問題

哲学からのとらえかた

ヘルダーからゲーレン、さらにはマルクス主義的人間学にいたるまで、哲学的人間学は、共通の基本的前提をつかちもっている。それは、社会、言語、相互行為と労働は「起源をおなじくしている」ということである[2]。つまり、これらのうちのどれが最初に生まれたのかを問うのは意味がないということだ。ひとがことばを話さず、たがいの行為の結びつきをもたないなら、どのようなかたちであれ人間集団が形成され、そこで共同生活がいとなまれるはずがない。つまりは社会が存在しえない。それとおなじように、はじめに言語があり、それからようやく社会と相互行為が成立したと考えることもできない。社会というものは、相互行為――つまり人間どうしの行為の結びつき――とコミュニケーションをつうじてしか存在しえない。また逆にいえば、言語はほんらい社会的なものであり、共同の行為連関のなかに埋めこまれているのである。言語、社会、相互行為という三つの要素のうち、どれが歴史的に先行したのかをつきとめようとするのはばかげている。この三つのものは、たがいがたがいを前提としあっているからだ。けれども、人間存在の基本的構成要素をみきわめようとする哲学的人間学だけが、このような言語のゆるがせにできない意義を強調しているわけではない。一九世紀の意識哲学も、言語の根本的役割をはっきり認識していた[3]。

意識哲学のそうした局面においてもっとも重要な位置をしめるのは、ヘーゲルである。ヘーゲルは、意識は言語のなかで外化され、他者にむけられるかぎりで意識たりうるということをはじめて指摘した[4]。

マルクスは『ドイツ・イデオロギー』のなかで、言語、意識、社会のあいだの結びつきを

つぎのようにいいあらわしている。

言語が生まれたとき意識もまた生まれた。——言語は実践的意識そのものだ。言語によって意識は、他の人間にたいして実在し、だからこそわたし自身にたいしても実在する現実的な意識となる。そして、言語は意識とおなじく、他の人間とまじわろうとするやむにやまれぬ欲求からはじめて発生する[7]。

言語哲学は——それが言語の本質規定をめざす学であるかぎり。——社会性が言語の根本を規定するとみなしている[7]。言語が言語たりうるのは、志向性(意味作用)をもち、社会にささえられ、歴史的個別言語としてあらわれるからである。

言語には……それとはべつの次元、主体相互の「他者性」にささえられる次元がある。つまり、ことばを創造する主体は、他の主体を前提としているということであり、したがってことばを創造する意識は開かれたものだということだ。……

この点をめぐって、言語は社会的事実であるから、話し手にたいしては個々の言語が強制されるしかないと論じられたことがあった。しかし、じっさいには、言語はむしろ社会的なもの、つまり人間どうしの共生の土台であるとともに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com